

## 龜田次郎君に答へます

平 井 金 三

君は八月の帝國文學へ長文の駁論を御出しなされ、前回の御論が私に反響があつたらしいと仰せですが、折角ながら、私の申したとを御讀違ひなされ、肝心質疑の要點に對する御答無く、何等關係の無い他事を多く御説きなされましたから、痛く失望致しましたのです、そこで今回も亦前の質疑を反復せればならぬ次第で、これ程、もの憂きとは御坐りません。

全株一方から言へば、君の今回の御論文前半即ち吾動詞が四段で有つたと云ふ御説は私の説の眞なるを證明するものにならぬので、反對の御論で有るに係らず、私は大に之を喜び此御説をして確實なるものたらしめんと希望致すので御坐ります。

右の次第ですから本論を大株二段にする必要が起つて参りました、其一つは君の御論が私の質疑の要點に關係が無いと云ふ

理由、從て前疑を反復せねばならぬと云ふと、今一つは君の御説は私の説を御賛成下さつたもので有ると云ふとすそこてすそこて今便宜の爲め此二段を前後致しまして御賛成の意になつて居ると云ふとを第一に申ましよう、尤も其詳細は後の質疑の處に至つて分かりましよう。

如何故此反對論が、私の説を證明するものなるかと申しますに、私は日本語はアリアン語で、吾動詞の變化は古しへに於て今よりも多く且つ入組んで居たもので有る、恰も英語が古しへもつと入組んで居るが、今は漆着語の域に返らんとして居る如く、日本語も今は單純の組織になつて屈折の區域を脱しつゝある、即ち兩者とも第三時代(屈折)を通り越し、第二時代(漆着)へ返らんとして居る、斯くなつたは人間が單純を喜ぶと云ふが一原因で有れど吾に在ては、古より支那人も多く入來り、殊に其學問も輸入せられたるなどが一層單純に趨く傾を早め、一見本來の漆着と思はるゝ様に、なつたと云ふが私の宿論で、此事は君も御讀下さつたと仰せの新公論誌に「日本語はアリアン語なり」と題して出した論文中にも申し置ました、又君の御來聽を辱ふし、それから今回の議論となつた講演にも吾動詞のみならず他の品詞も、古くは色々入組んだ屈折變化が有つたと云ふとを演べ、其佛を止むる者と信ずる例を擧げました、「來る」とが君の御文中に見ゆるも、もとはと云へば右の宿論を立證するに當り關聯して序に持出したので御坐ります、そこで今の動詞の、中一段に屬するものゝ如きは其變化他のものに比らべて甚少い、古はもつと多く變化したもので有らうと信じて居ります、それ諸君の御説即ち四段活は上古の眞跡で有るとも立證せ

承知の事では有りますが、事の順序として、左に二三其例を擧げるとにいたしました。

併し其前に、動詞活用形の成立に付ての御説に關し一言致し置ます、君は吾動詞の形は母音變化、類推作用漆着の三つより出來たと御説きですが、これは印歐語にも有るとて吾動詞に限つたとては御座りません、

さて右に申した例に及びましよう。

先づ御示めしの際、觸忘の四段活用にせられたる數例に付ては、彼の「詞のやちまた『おそる』の處に『おそり』とし「古くはかく四段の活にも用たり此例例、觸、忘などあり」と記し、又古事記傳十一卷、青山に日賀久良婆の本居ぬしの註に『古言の一の格なり…此格はカクラム、カクリ、カクルとはたらくなり』とありて四段のみ古代の格とは無い、尙ほ萬葉一に「山のまた、いかくるゝ迄」又萬葉十二に「妹にふれなば、吾むたにふれれ」と云ふがあり、又「やちまた」にも『古事記には「妹はわすれじ、世のことく」に」とあり、かくては下二段の活なり』と御座ります、所相の「る、ちる」も、古事記「やかえ(れ)て」萬葉「人に厭え(れ)人に惡ま(れ)何れも下二段です、又敬相の「ます」に就ても「やちまたに萬葉から」みこと、とはさず「たすれば」の下二段の違例が引いて御座りませぬ、又「令」の「す」も四段と下二段と兩つあるとは申迄も無い、又上古では下二段の命令に「よ」を添へずして用ゐて居たとて二つの例をお擧げしたがこれも「やちまた」に反對の例を擧げ「萬葉集に「きなきとよめよ」かく「よ」もじをそへざれば下知の詞とならざるなり」ともあります。

らるれば愈以て私の思ふ處に稱ふので「來れば」ける人やたれの例を御引なされたとは、私の説に反對にはなりません、「く」け、「き」となり、今より多くの變化をして居たとを證せられたので御座ります。

斯う云ふ理由ですすから變化の多かつた證據を見出す時は備忘録にも控へて居ますが、斯學は私の専門の學科で無く、殊に御説の通、私には國語の智識が無いのと、多忙とて身をこれに打任すとの出來ぬを遺憾に存じて居ます、故に動詞が上代に於て多くの變化をしたとの御説は喜んで歡迎するので御座ります。尤も今回御出しになりました諸例は、君が「我動詞活用についての祖書である」と仰せられ、私も亦左様心得多大の尊敬を拂ひます「詞の八衢に大かた出て居まして、此等や、自分が彼は手びかへ致したものと皆上古多變形なりし動詞の遺存して居るものと思ひ珍重して居りますが、併し此等を以て其多變形が何の時代に如何なりしやといふと確に決する程の證據には致し兼ねます、實は萬葉や古事記時代に四段活として使はれたれども、今は下二段にするとして御擧げになりました諸例も其同じ萬葉古事記中に矢張下二段に似た例の有るとは「やちまた」にも掲げてあるし、私もあれこれ見とめて居ます而已ならず、其時代に於て一段、中、下二段の語も多々あるのですから、右の時代には幾段で有つてなどは極められず、又夫より以前は尙更分らぬから、多變形で有つた事は確に分かるが、時代や段格の數を定むるとは困難であると考ます。そこで御擧げになりました諸例に反對の例有ると併びに四段活以外の詞が、萬葉古事記其外にも多く使ふてあるとは既に御

君の御例ばかりを見て居れば、萬葉時代には四段言より無かつたかの様に見える人も御座りましよう、併しそれには一一反證を擧げましたが、令御示めしの例に係らず、同時代に用ゐられた四段活以外の例を擧げて置ます、之も立論上已むを得ませんから、君には御承知のとながら御免を願ひます。不規則動詞では萬葉一「國見をすれば、船のりせん」と古事記歌、朝日の笑み榮え來て、古事記みとのまきはひせん、と、萬葉三、玉よせもち來、白玉よせ來、かへり來ん、使來んかと下二段では、萬葉一「はる日のくれにける、此川の紹ゆるとなくながらふる、見さけむ山をけふか越ゆるん、萬葉十二、出る日の色に出でず、馬なめて、萬葉三ちりみだれたる、みたれにけらし、全十二、わかれなん、越えなん、全一、かりはしおもほゆ、古事記では、天のみ柱みたて、八尋殿をみたて、布斗麻邇に下らへて、つまぎかれて、夜は出でなん、葦船に入れて流しすて、中段にては、萬葉十二、戀る間、戀れども、水かげに生る、眼こそ忍ふれ、萬葉一、落ちず、吾戀ふる、一段活にては萬葉一、見れば、見るに、見れど、射る、圓方は、古事記、胸見る時、全歌打見る、島の崎々、撞見る時の崎落ちなど御座ります。

以上は見當り次第に書上げたばかりですが、斯様な例は幾らでも有るから一二枚擧に暇がありません。一段と中二段のとは私の質疑の中に問はなんだと云ふ理由で何事も御説は無つた、それはよろしとして、君の御擧げになつた例は、いづれも下二段活用をもするもので多くの動詞中特種のものであるから「やちまた」の著者が、ことさら説明を加へ

たもので、尤も「やちまた」に擧げられた外にも此に類する  
 ことが有るにしても、未だ下二段音が悉く四段音で有つたと言  
 ふ、證據は無い、何故なれば、上にも示めず通四段音以外の例  
 が、無数にあるのですから、いづれが根本であるかと云ふと  
 定め難いのです、言ひ代へますと、どちらが先きに有つたかと  
 いふことになりませぬ。

そこで御尋申上ぐるのが御座ります、私が日本語とアリアン  
 語とは全じてある、殊に文法に於ては印度及びペルシヤ語と殆  
 んど相同じと云ふとを、新公論にも、又彼の講演にも論じまし  
 たが、君は私に年代の考をせずして比較すると言ふとを仰せら  
 れ、前回の御駁論にも、今回のにも、くり返へし、厳しく年代  
 に付て御答めになりましたが、君の御説にしますると四段活時  
 代と云ふはいつのとて御座りますか、萬葉古事記等には上にも  
 述べました通り既に各種の活用がありすから、いづれ夫以前  
 の事に相違無いが、左致しますと四段より無かつたと言ふ時の  
 動す可からざる證據を御洩らしあらん事を願ひます、尙「よ」も  
 後に下二段へ入つたといふ御事です、なる程、左でもありまし  
 ようが、然致しますと下二段より一段及中二段が古るいものと  
 なります、これも四段から生れたとすると、それも年代を知  
 り度、又四段活に「よ」は無いから、一段及中二段の生れた頃  
 は「よ」が無かつた筈である、そこで其「よ」はどこから何時  
 代に入りましたか、これも萬葉時代にあつたもので明日香清  
 御原御宇天皇、吉野に幸し給ふ時の御製として「よき人のよしと  
 よく見て好と言ひし芳野よく見よよき人四東三」と萬葉一にあ  
 りますから、これより以前に出来たものですか、君の御説は如

とあるので、此中に「る、れ」が何から變化し、其本は如何なる  
 語で有つたなど問ふ意は少しも含んで居ません。

誤解の無い爲め極めて平たく問ひ直ほします、長文を恐る、  
 が、要點を説明する上から、正むを得ません、私の問は、「く」  
 が「くる、くれ」となり、「う」が「うくる、うくれ」となる時の「る  
 れ」は他の動詞より分出變化混淆したとしても、「る、れ」無くじ  
 て變化する「く、け、うけ」の「く、け」をも又、四段の「ゆく、ゆけ、  
 ゆか、ゆき」の「く、け、が、き」なども「る、れ」同様他の動詞よ  
 り分出等したものとせらるゝかと云ふが一問です、君は是れ皆  
 四段より分出したものであると御説きしよう、然し夫ては未  
 だ答になりませぬ、何故ならば君は四段活が根本で有ると仰せ  
 あるからは、「ゆく」が「か、き、く、け」の四變化をせれば四段活  
 とは言はれませぬ、君は今の四段は上古の四段とは異なりと仰  
 せてすが、左うしても、四變形あるには相違は無い、ともかく四  
 變形即四段活が根本であると言ひ、同時に之を他の動詞から分  
 出變化等したと言ふては矛盾になります、何故ならば、其所謂  
 他の動詞の活用は如何と問はればならぬからです、それでは始  
 めの質問は、幾回にも、くりかへされ、萬葉末代に至る迄一步を  
 も進む事が出来ませぬ。故に現今の四段活が古へのもとの異  
 なりて居ても、又同じく有つても、君の御説では四つの變形が  
 基礎で無くては稱ひませんが、それをも尙ほ他の動詞より分出  
 したと仰せられますか、これ私の第一問です、斯ふ云ふ理由で  
 すから先にも申した通、數多の例を擧げ四段から凡ての動詞變  
 化が出たと云ふことを御説きになりましたことが、本論に關係  
 の無い餘事で私の質疑への御答になつて居ませぬのでせう。

何てすか承度存じます。

私は君の御説に對し私の意と合はざる處は一二具體的に其點  
 を擧げて論評致します、決して一筆に批評して其説が讀者に誤  
 解せらるゝ様なことを致すまじと思ふ心から不思議に申しま  
 した通、以上は本論に何等必要の關係が無いのです、何となれ  
 ば「は」私の説を助くることになり、一には斯様なことは私の質  
 疑に少しも無いので御座ります、尙ほ下にになりますれば其事が  
 明かになるであらうと存じます。

これより先に申しました通第二段に移つります、即ち今回の  
 御論は私の質疑の要點に何等關係の無いものであると云ふ理由  
 を申上ます隨て更に前の質疑を回復いたします。

君は動詞の活用形に存する「る、れ」が何から来たかを私が問  
 ふたとて、其因縁來歴を長々と御説明になりましたが、私は左  
 様なことを問ふたことは毛頭御座りませぬ、今ま前回の文中よ  
 り之に關した處を爰に寫しますと、左の通りです。  
 『論文の「他の動詞から分出變化混淆云々」と云はるゝは「く」  
 の變化の中語尾の「る、れ」などの事と思はるゝが、規則動詞の  
 中にも「る、れ」を附けて變化するものあり、又之を附けずし  
 て變化するものも有る、これ等は何とさるゝか、よし夫も他の  
 動詞より分出變化等したものと論ぜらるゝとした處で「不規則  
 動詞の「く」が「こ、き」となるは何と言はるゝか、斯の如き變  
 化をも漆着と云はるゝか、不規則動詞では無い、規則動詞で  
 も「二例を取りて言へば「ゆく」が「ゆけ、ゆか、ゆき」となり  
 う」が「うる、うれ、え、え」となる類は漆着變化と云はるゝか、

又「る、れ」に就ては先にも申す通り私は問ふたとはありませ  
 ん、然るに、これは「有る」から來るとして御説明ですが、これと  
 ても右第一問の答にはなりません、何故ならば「有る」の變化  
 「らり、る、れ」も他の動詞より分出したと言へば、上と同じ  
 論理で、質問はいづれも残ります、夫故これも本論に無關係  
 のもので、あつて、左様な事を問ふ必要は始めから御座りませ  
 ん。

次に第三問に移ります、上の事は、よしとしても、「來る」の變  
 化「くる、くれ、こき」中「こ、き、る、れ」「ゆく」の變化「く、け  
 か、き」又「う」の變化「うる、うれ、え」等となる中の「う、え  
 る、れ」を漆着變化と仰せてすかと問ふので、今「一層單純に言へ  
 ば、たとへば「ゆく」へ何者が漆着したから「く」が「け」や  
 「か」に變り「う」に何者が漆着して「え」となり、又、「うる」  
 に何者が漆着して其「る」が「れ」と變化したかと問ふのです、又  
 君の御説に従ひ「る、れ」は「有る」から來たとして何ものが  
 漆着して「有る」の「る」が「れ」となるかを承り度いので御  
 座ります、君は之を單に母音變化であると御説きなさいが、知  
 りませぬが、如何にも「ゆく」の變化が ka ki ku ke de a u  
 の母音變化に相違は無い、併し此變化が有ればこそ四段活が  
 出来るので、決して無意味の變化にはあらず、これ無くば四段  
 活は亡ぶるとは申迄も無く、恰も拉丁の直説法現在我愛する「  
 amare」を命令法では amato となると同じく最も重要な變化であ  
 つて、これを屈折變化と私は申します。  
 爰にも「る、れ」の事を言はればなりません、君は「これを「有  
 る」から來ると仰せてすが、其「有る」の變化「る、れ」は抑も

何ものが漆着して「る」や「れ」となり或は「る」に何ものが漆着して「れ」となりましたか。

右の理由で有るから「る、れ」の何か来ると問ふ必要も無く、従て左言ふとは本論に何等の關係が無いと申す所以です。

以上のわけですから私の肝心の質問には少しも答が無い夫故、こゝに再び問を出したので御座ります。

乍併こゝに一言致すとが御座ります。君の御説が私の質問の要點以外に亘りてあるを見、甚だいふかしく思ふたので、無關係のものを長々しく言はるゝには何か子細あるべしと存じ段々考へた末漸く其故を解するに至りました、と云ふは「變化」と云ふ語に對する見方が君と私と違ふて居るので、従て漆着風折の意考も兩方相違して居るので。

私は風折變化とても言ふか然らずんば本文の前後に依て其意の自から知らるゝ外、單に變化と申したは上にも段々言ふた通り、語が他の物に結合ふ時其語が曲がると、たとへば「ゆく」が「かき、く、け」「う」が「ふ、え」となるも、又「うる」の「る」が「る、れ」となるも、又形容詞で「よく」が「き、け、く」となるも、最後に「う」が「うる、うれ」「よ」が「よし、よき」等となるをも含むので此最後が君と私との間に反對の論を生ぜしむるものか、或は其重なるものと存じます、君は先にも申す通「かき、く、け」變化に付ては何等の御答へも無い様ですから上に質問をしたてすが、「う」「る」「れ」が附くを漆着と仰せあるらしく、従て變化と言へば此點を御指しになつてあるらしく存するので、それがため「有る」の説明が出たので有りませう。

語根	語尾	語根	語尾
Nom. soph	+os	終止	yo +si
Gen. soph	+ou	連體	yo +ki
Dat. soph	+oo	已然	yo +ke=(kere)
Acc. soph	+on	然用	yo +ku
Voc. soph	+e	連用	yo +ku
(賢しこ)		(善し)	

右の兩方を比べれば其成立の全く同じきことを知り、異なる處は、一方は格によりて變化し他方は然らず、然れども語根へ變化せる語尾を附するは兩者少も異ならず、故に日本形容詞の變化を漆着變化と言はゞ希臘形容詞も漆着變化と云はればなりません、然して其 *os* や *on* や *ou* 等が何て有つたかは別問題で、こゝには關係は御坐りません、或は日本形容詞には格の變化無きが故に風折にあらずなど言ふ人もあるべけれどサンスクリットに於ては厄介なる變化を棄つる便法を用ひ、又ベンガリー、語、オリヤ語の形容詞は何等の變化をも致しません。

動接法	現直	現接	現接
amem	amor	amey	1.
moneam	moneor	monear	2.
regam	regor	regar	3.
audiam	audior	audisr	4.

は吾四種の變化の如し

ose	asar	osarure
osa	osare	osare
ukure	ukerar	ukerare
uke	ukerare	ukerare

以上二種變化餘を略す

然るに私の考は全く異なりて居るので、印歐語の成立及變化は皆此類で、如何に長い語といへども言語學上其歴史を調らべたものならば皆一根本の獨立して意味のある語へ返へすことが出来る、そう言ふものが色々々に連結して語をなして居るてはありませんか、又極めて短い *eye* 即ち「人稱の「有る」と云ふ意の英語でも、其根本は *ey* 即ち「有る」である、斯く兩語連合したものであるからとて之を漆着語で有ると言ふものは無い、又 *tree* と *to* と合して *tree to* を失ひ *tree* となつた如きは英語變遷中ても新しいものに屬し *to* は *to* 有つたと云ふとは極めて知り易い歴史がある、夫故其形から言へば漆着と言ふ事を得べきものであれど、矢張風折の價あるものと致しません、若し語根が分つて居るから漆着であると言へば印歐語の中で漆着語ならぬは一つも御座りません、それとも「うる」「ゆく」の「くる」や「みる」やが知られたる年代に於て「有る」から來たと云なれば、もとは漆着で有つたと言ふも出来るが、上に陳べた變化は皆古事記萬葉其外吾國最古の文學中に既に見らるゝ處のものである而已ならず、君も御説きの通り今より多くの變形が有つたので、上古に溯るほど風折變化をしてゐたと云ふことが分かります。

今希臘語形容詞成立の一例を日本形容詞成立と對照しますれば次の通りです。

能現在	直説法	現在
愛す	amo	amō
勸む	mono	monō
配す	rego	regō
阻く	audio	audiō
		以上
		osu
		uku

拉丁語 日本語

動詞に付ても例を示めして比較致しますと右表の通りです。上の表を見れば兩者變化の有様が全一にして語尾が加はるのみの變化では無い、即ち風折して居るとが解せらるゝであらうと存じます、従て語尾に付いた物が何から來たるものであるやは風折か否を定むるに關係は無いので御坐ります、君は「來」の「き」が「こ」となるは「木の葉」を「このは」といふと同じ母音變化に過ぎぬと言はれ、之を極めて價無きものとなさるが、母音變化無くば語尾に連なるとが出来ぬ、又英語の *come* が *came* となるも母音變化であるが、此變化ありて始て風折の性質となるので、英語が段々漆着語に移りつゝあるは如斯變化が年代の進むと共に少なくなるが爲めて御坐りまして、その處では極めて少數の斯様な變化が残存して居る斗りです、併し風折語の部類に入りてあるとは無論です、吾國亦同じ經歷を経つゝあるので御坐ります。

次に君は私の印歐語と日本語の「單語比較は實に根本的誤謬である」と仰せですが、然らば其誤を指摘なきは如何です、君は我が似寄つたものが有れば直に之を拵へ來て同じ物なりと斷じ、其單語についての解釋なども單に印歐語の上のみ説き去つて日本語の上についての變遷及解釋などは等閑に附せられた

傾が多い」と言はれ前後二回の論文に只漠然たる批難のみ承ります。私が致した單語比較に就て、誤れる點を御示めしなつたとは御坐りません。併し誤れる點あらば之を擧げ、然々あるが故に誤りであると詳に御指示めしあるが批評する人の責任ではありますまいか。

又私が日本語と印歐語とを比較するは「何の縁故あるによるか、兩者の間に言語の特質相似の點あるか」と問はれましたが、そんなとは今更問ふ必要の無いとして、君には相似の點は毫も見出さぬのである、日本語と印歐語とは全く言語上の性質を異にして居るものと斷言する」と仰せてすが、君には其特質が見へぬからとて他人も見へぬと思はれ、それを人に強ひんとするは獨斷の最も甚しいものです。私には相似の點が見ゆればこそ、久しき以來之を唱へ、聊ながら世にも發表し、斯くて、お互の議論となつて居るのは御坐りませんか。

君は私が年代の考について御答へ申上げたことを研究史と述べたと仰せてすが、どうか、今一度前回の私の答を御熟讀を願ひます。又若し私の調べに年代を無視した處があらば、其誤りて居ることを御示めしを願ひます。詳細に誤を擧げずして二回迄も同じ事を御くり返へしなさらば、如何なる理由か私には分りません。

君は保科助教の「言語學大意」を御引きなされ、ウーラル、オルテイクの物質を擧げると、四ヶ條を御示めしになりました。

第一には、清音が最初に發達して濁音が後に發達したと云ふことです。君は年代の考を連りに仰せてすが、一昧濁音は何年

國語及ヘルシヤ語の特徴で御坐ります。但し語の位置の轉倒は文の都合で色々に出來ます。日本も其通りで、ことに歌には毎々例に出會ひます。平常の口語にすら申すので「柿一つ下され」も一例です。それ故限定詞が「必ず」前にあると云ふとは「ウーラル、オルテイク」では言はるゝかは存じませんが、日本語には當らぬのです。

第四、語は決して變化することなく形式上變化するものは語根に附屬したる形なること。

これは語が簡潔で解釋に苦しみます。「折悪しく」言語學大意」を合せしめから説明を見る事が出來ず從て變化の如何なるものと云ふことを、突とめ兼ねます。併し吾國の語が變化することは上にも申しまして其變化が印歐語變化と同じことも、説き明かしましたから、此一ヶ條は一種特別のもので、ウーラルタイ語に限り、吾國に無い物でしょう。もし上に述べ來つた中のものであらば印度語にも有るとして、日本に有つても、それが爲に吾國語がウーラル、オルテイクであると申されません、ともかく意義が私に不明であるのは甚遺憾に存じます。もし意義の説明あらば御答が出來ると確信いたし居ります。

第五、關係代名詞の存在せぬ

これに付ては代名詞の根本から説明をせねばなりません。非常に長くなりますから、簡単に要領を申しませう。

希臘語の關係代名詞はサンスクリットの關係代名詞と同根元よりいて、サンスクリットの了れる、其指示代名詞と共に三人稱代名詞より出て、居ます。前回三論文中に私が貴問に應じて説

代に吾國に發達しましたか、吾最古文學中には誤つた處も有るにせよ、大體に於ては古代國語の清濁を正して書いて有ることとは誰も承知で、君の尊敬なる「やちまた」の著者の父君も語を極めて此事を言ふて置かれたては御坐りませんか。併し近頃新説が出て居るかは存じませんがもし有らば獨斷や想像にあらざる確實の證據は如何ですか。印歐語とて、清て有つたものが濁に變じ、又逆に變じたものも御坐ります。吾國にも左う言ふことならば有る可きことです。

第二に、文法上の形式は屈折を以て示すこと無く、概は語尾にて示めすが、例である、と云ふこと、此事は上に既に述べましたから申しませんが、但し印度及ヘルシヤでは屈折が極めて少くない或點から言へば吾國のよりも少ない、此事も君より年代の御答を蒙りましたので、それは前回に答へました。御再讀を願ひます。

乍序申しますが、君が年代のことで御答でたから、私よりもウーラル、オルテイク語に關し年代を御尋申したが、其御答はなくて、又候私を御答になつて居ります。これも再質問の一ヶ條で御坐ります。

第三には、文章に於て主格が第一に來て、説語が最後に來ること、限定詞は被限定詞の前に有ること、名詞を限定する言葉は必ず前に有ること。

此等の事に付ては御聽聞を祈した講演にも述べ、又語學にも其筆記を出しつゝあるし、當時之は新聞にも筆記が出版しましたし、以前新公論にも掲げまして既に御承知と存ます。即ち右第三ヶ條の諸條件は其まゝサンスクリットを始め印度アリアン諸

明しました日本の「左様」「サ又」「ソチ」「ソレ」「ソレ」等の代名詞ともなり、英語のsoもSheともheともthatともなるので同じもので有ると申しましたが、此「ソ」又は「サ」より出たものが指示代名詞とも關係代名詞ともなりて來ました。英語ではthatが矢張saの變化で指示代名詞にも、關係代名詞にも用ゐられます。それから英語の疑問代名詞と關係代名詞と兼ねる what, who, how, why等を以て始めて居るものは、もと疑問詞から出來たので日本の疑問詞「が」はサンスクリットでもkaでこれと其變化とが疑代名詞で、kaが少しく變りて拉丁のquis, quom等の疑問代名詞又其れと殆んど同形の關係代名詞とを作つて居ます。英語のwhは右のk又rの弱音で矢張同じものです。そこで關係代名詞にはsa及kaの兩種類が有ります。即三人稱代名詞と疑問詞とを根元として居ます。して見れば日本の代名詞「ソ」及其變化「ソレ、ソノ、」等は使ひ方に依りて代名名詞となり、印歐語の代名詞と名の付くものは之を以て譯するものが出來まして、畢竟今日迄其名稱こそなけれ、實物は有るのでしたとへば「あなたは今手紙を御讀みです」「それを私に先きに見ようと思ふて居ました。」「且那樣只今生命保險會社の人が参りました。それは昨日も参りました」と云ふ時の「それ」は立派な關係代名詞で英語にすればthatやwhoで譯するから始めて關係代名詞になり變はる様に思ふ人は世間に多く有ります。ことに「人其人はさうした處の」とか「手紙それはさうした處の」など念入の讀方する人は尙更左う思ふてしよう、又拉丁語の代名詞の一つの使方たとへば Accipit, quas, the- ris ad me dedit」とある, grasを譯するに「私へ宛送りなされた。其手紙を受取つた」として少しも差支は無い、關係代名詞

て有りながら指示代名詞の如くはたらかせてあります、そこで印歐語の中關係代名詞の使ひ方は國によりて色々になつて居まして、只習慣の爲め使ひくせが違ふて居ます、日本も其一て御座ります、尙印度アリアン諸國語の關係代名詞には色々種類が御座ります

以上述べて来た通り日本語は「ウーラル、オ尔特イク語」で有ると云ふ論は立たんので御座ります、然かし、茲に一言添へて置ます、私は「ウーラル、オ尔特イク語」を研究致しませんから果して日本語と同一なるや否やは自分で比らべた事は御座りません、そこで研究の結果日本語とウーラル、オ尔特イク語が全然同一に相違無いとあらば其ウーラル、オ尔特イクもアリアン語で有ると言はねばなりません、つまり今迄の研究が不充分で有つたと云ふことになるので、此事は私の話を筆記して講演當時の「日本」にはたしかに載せて御座ります、

入らざるとながら御言葉に尾して一言致します、君はアストン氏が日本語とアリアンと關係有るとか言ふ論を掲げ私と同説を唱へられたるが定めて私も見たて有らうとの仰せですが、私は斯學を専門として居るで無く、ことに其頃江京都を重もな住所としたして居ましたから、何人が如何なる書を著されたかを知らず、又いつも多忙に暮して居ますから、好きな道ながら斯様なものに關した書籍など調ぶるとすら今以て御座りません、今君より此書有るを承り、誠に良友を得たと喜び、いつか機會を得て一讀致度存ます、次にロウエル氏が日本ビルマ兩語比較といふものさへ出たので有るといひかにも之は日本近時海外と交際上の状態に鑑み喜ぶ可きかの様に仰せてですが、此書名

も始て承りました、然るにアストン氏の方は表題によつて自説に類したるを論じて有るかとは推測も出来ませんが、ロウエル氏の方に至ては其表題にビルマ語との對照と有るから、一見吾國語を支那語族と同視した様に解せられますが、本文に對する御答も下されませんならば右の書の内容大略、一行か半行ほどにて宜しう御座いますならばお洩らしを願上ます、

最後に今一言申上げて此文を結びます、君は私が從來世上の諸學者と研究の方針を異にし何の緣故ありて日本語の比較を印歐語に取るかと御答ありて「自分は矢張從來世の學者達が其言語の特質に相似の點多きウーラルアトルタイ語族のものに比較した例に従ふ可きものと信ず」と仰せられました、斯う云ふとは今迄に頼と聞いたもの無い言葉です、君には、それでも宜しいでしょうが、私に迄世の學者達の例に従ふべしとは無理な御注文と存じます、世界中の學者が何と云ふたとて、自分の信ずる事を曲ぐる事は金輪際ありません、其代り自分がもし誤つて居るとも分かれれば秒時を移さず自説を棄つるに躊躇は致しません。

洪水汎濫の後、家の周圍殘水の尙引切らざるありて家内取こみ思ふとも十分に述べ兼ねます、從て意義の通じ難い處も有るとも存ますが、稿を改めず御答を兼ねて前疑を再び御尋申し上ます。(明治四十年八月廿六日夜)